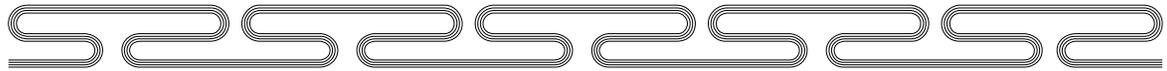


掘りday はちのへ

—八戸市埋蔵文化財ニュース 第5号—



遺跡風景



作業風景



深さ 1m 以上の竪穴住居跡

急斜面と漆！ 戦いの林の前（はやしのまえ）遺跡発掘調査

最大傾斜 30° 以上、そして多数の漆の木。これが林ノ前遺跡を象徴する景観です。漆は現代のものですが、急傾斜地であることは今も昔も変わりません。平場の試掘調査を行った際に、そこが平安時代の大規模な集落であることはおおよそ分かっていました。しかし、写真のように遺構が斜面にもたくさん存在するとは驚きです。この遺跡の調査は実に過酷でした。毎日

100 mの斜面を往復する廃土の運搬は、容赦なくみんなの体力を奪い、さらに調査前に伐採したはずの漆は日々元気を取り戻し、いつしか私と作業員数名を襲ったのです。古代の人々は、どうしてこんな厳しい場所を生活の舞台として選んだのでしょうか。そこには、何か特別な理由があったと考えられます。

（小保内 裕之）

重地遺跡（しげち） —縄文時代のムラの跡—



全 景：空から見た調査区全体の様子

「月のクレータのようだ！」と新聞記者が現場で叫んだほどに、穴・穴・穴だらけで凸凹の世界。ストレス増・体重 5kg 減の疲れきった現場でした。



作業風景：土坑の内部を調査しているようす

直径 3m・深さ 2m 前後の穴、中は空っぽでした。ひたすら穴掘りに精を出す体力勝負の仕事が続いた。

重地遺跡は八戸市の南東部に位置する新井田地区に所在します。以前から土器がゴロゴロ落ちている所で有名？な遺跡です。

今回は宅地造成に伴い、調査が行われました。調査場所は東西に張り出す舌状地形の丘陵で、ここから市街地が一望できる絶好の場所です。湧き水あり、日当たり良好、山の幸豊富!! とくれば今で言う一等地で、縄文人が宅地として見逃す訳はありません。

そんな訳で予想に反せず、住居跡をはじめ竪穴遺構（小屋?）・土坑（貯蔵穴）・土器埋設遺構・屋外炉・溝状ピット・溝跡など計 374 にのぼる遺構が発見されました。

調査の結果、縄文時代の前期・中期・後期の各時期を通じてムラが営まれていたのを知ることができました。住む環境基準は、今も昔も同じことが言えそうです。

（小笠原善範）



土器：カゴをイメージさせる円筒形土器

縄文時代前期の北日本にみられるバケツの底を深くした形の特徴的な土器。

この土器は、胴部に網代編みと同じ編み方で網目状に組む特殊な文様がみられます。

縄文人が一番縄目に凝りに凝った時期！

是川中居遺跡

—低湿地遺跡の調査—

是川中居遺跡では、平成11年から八戸市縄文学習館の南側に広がる草地を発掘しています。これまでの調査では西側の山手から東側の低いほうに向かって沢が2本のびていることが確認され、沢の中には約3,000年前（縄文時代晩期前葉）の捨て場があることがわかっています。

今年は、12年度の調査地点から北西へ上がった旧管理棟の南側部分を140㎡発掘しました。そのうち湧き水をポンプでくみ上げながら沢の底まで調査できたのは30㎡程です。

調査の結果、現在の地表から約2m掘り下げたところに幅7m、厚さ約70cmの泥炭層が残っていました。ここからは縄文土器、石器、石製品、土製品、木製品、獣骨等が出土しています。なかには朱色鮮やかな壺形土器、藍胎漆器とよばれる竹などで編んだカゴに赤漆を塗って固めた容器、弓に塗られた赤漆の皮膜部分、土偶などがみられます。

昨年までと違って、泥炭層にはトチノキ等の木の実の殻は見られないことから、それらを捨てている範囲は、今回の発掘区よりも下側の低い部分に広がっていることがわかりました。

（宇部 則保）



赤漆塗りの壺など多くの遺物が出土しました



沢に堆積した地層の断面



人がいるところが沢の中の捨て場です

八戸城から地下室^{むろ}

八戸城は江戸時代に八戸藩の城があったところです。

平成 13 年度の発掘調査は、本丸の北西の縁部分 568 m²を調査しました。八戸城跡古御殿御絵図面では「御花畑」にあたります。

今回の調査では、地下室が検出されました。地面を 2m 以上も掘り下げて作っています。規模は、長辺 4.0m、短辺 2.2m、検出面から床までの深さは 2.18m です。柱の跡が長辺に 4 個ずつ、短辺の真ん中にも 1 個ずつの合計 10 個が残っていました。ちなみに床下には、地下室より古い土坑がありました。

地下室は一気に埋め戻されていました。埋め土の中には、陶磁器や鉄釘がたくさん入っていました。

陶磁器のなかで特に多かったのは、釉薬がかかった瀬戸産の植木鉢でした。お城で菊の花でも育てていたのでしょうか。植木鉢は 18 世紀の中頃から、もう幕末近い 19 世紀前半ごろのものです。地下室を埋めたのは、少なくとも 19 世紀前半ごろから後ということになります。

(渡 則子)



地下室（上下の溝は室とは無関係）



植木鉢出土状況



瀬戸産植木鉢



床下の土坑の調査

明治時代の八戸三社大祭

—東北地方屈指の大規模都市祭礼—

平成 11 年度から始まった八戸三社大祭の文化財調査が平成 14 年 3 月 31 日で終了しました。

この事業は、江戸時代から連綿として継承されてきた祭りの歴史や現状を調査し、今後の八戸三社大祭のあり方や文化財としての重要度を判断するために行われたものです。

調査体制として、京都学園大学教授で全国の山・鉾・屋台の祭りを調査している植木行宣教授を座長とする民俗学専門の諸先生と八戸市教育委員会からなるチームが編成されました。

ここではその成果の一部として明治時代の祭りの様子を紹介します。



華屋台 (伝明治末頃 写真＝中里進氏提供)

祭りの規模 明治 39 年 9 月 11 日の『東奥日報』には、行列の長さが約 5 町 (約 450m) あったと記されています。現在のお通りの長さが 2.7km 以上に渡っているのに比べれば、明治時代の八戸三社大祭 (当時は三社御祭礼などと呼ばれていた) の行列は現在の 5 分の 1 程度しかなかったこととなります。

しかし、それにも関わらず八戸の祭りは広く知れ渡っていたようです。

全国に伝わる地方風俗などが紹介されている『風俗画報』の第 42 号 (明治 25 年) には [凡廿里四方より集まる見物人に山又山をなし其賑の盛んなる山も崩るゝ計りなり「さあかーる一さあかる長者の山今夜ば一かりー」の唄は青森、岩手、秋田、宮城の各縣下に互て唄ふところを以て観るも亦其盛大なるを知るに足らん] と記されていて、祭を見るため約 80 km 四方から見物人が集まってきたことを伝えております。

祭り振興策 江戸時代の祭礼は、藩や法霊大明神 (現在の龍神社) と一部の有力商人が深く関わっていましたが、明治時代になり藩制が崩壊するとお祭りは龍・新羅・神明の三社とその氏子や商人の手に移り、自由な発想のもとで経済振興とも深く結び付いて行きました。

明治 29 年 8 月 15 日付けの『東奥日報』には「本年は日清戦争勝利祝賀祭を兼ね盛大なる祭典を執行せんと口より祭事総世話人大沢多門氏は遇般来京阪地方に趣き八戸商人の各取引店を誘導して種々の祭旗及神輿 2 台を購求し (中略) 一の関以北青森までの鉄道運賃を 5 日間位半減にせられんことを鉄道会社への請求の由」とあります。

また、明治 34 年 8 月 31 日の『東奥日報』にも「9 月 1 日より 4 日まで 4 日間青森より八戸盛岡より八戸までの両駅間に於ける汽車賃割引の事を祭典総代より日鉄会社へ請願せり」という記事がみられます。

明治時代には、広い範囲からの見物客を見込み鉄道運賃割引による祭り振興策が展開され、このような努力が祭りを有名にしていたものと考えられます。

行列の特徴 明治期の山車参加は 10 台前後であり、現在の山車 (26 台) よりはかなり少なかったのですが、当時祭りに参加していた芸能は今よりかなり多岐にわたっていました。

鮫・小中野芸妓連による踊り屋台は祭りの花形として人気を博していたし、現在の祭りに参加している大神楽・虎舞はもちろん今日ではみられなくなった商宮律 (* 1)・剣舞・駒踊り

けいばい がんにおどり
・鶏舞・願人踊 (* 2) なども八戸三社大祭に加
わっていました。

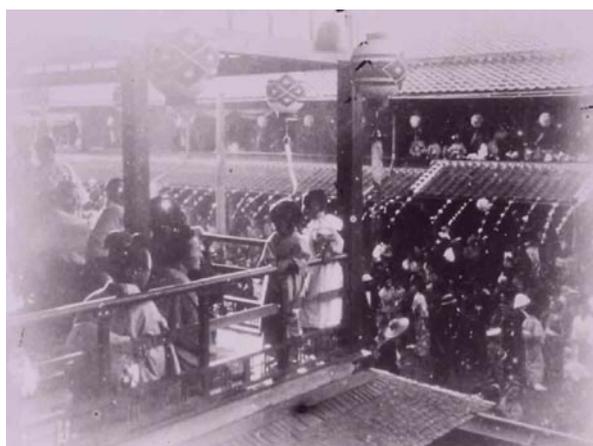
注目されるのは当時の芸能集団が八戸だけ
なく階上、南郷、名川、福地などからも集まっ
てきていたことで、この時代の祭りには旧八戸
藩領を基盤とする伝統が未だ強く残っていたこ
とがうかがわれます。

祭期間中の町の風景 明治時代の祭りは、家々
に軒花 (* 3) や軒提灯が飾られ独特の祭りの雰
囲気をかもし出していたようです。

明治時代 32 年 8 月 30 日の『東奥日報』には、「毎戸
軒提灯及角燈等にて一層景気を添えり」とあり、
同 33 年 8 月 18 日にも「各町の境即ち辻路二は思
ひ思ひの大灯籠と大旗を立て町内の路上には
各々球燈を点し見物人雑踏して随分賑わいた
り」とあります。そして、提灯の明かりで町が
昼のように明るいことから「不夜城」のよう
であったと表現されています。

また、この頃は毎年新しく作る山車が運行さ
れ、江戸時代以来の山車人形は店先に飾られる
ようになっていたようです。

明治 34 年 9 月 7 日付けの『東奥日報』によ
ると「廿八日町の西町屋では為朝鬼ヶ島、十八日
町の佐の川では高砂、八日町河内屋では武田信
玄と児島高德、三日町近江屋では太公望、鈴木
の神后皇后、大工町大久保の恵比寿鯛釣、六日
町岩岡の源義家等」が店先に出され飾られた
ことがわかります。



明治時代頃の祭り見物風景 (写真=中里進氏提供)

商家の店先には人形だけでなく、生花や木綿
織物なども展示され、旧家では大小の旗・軍道
具なども出して見せていたようです。

前掲の『風俗画報』には長者山で演劇・舞
踊・打毬・競馬・撃劔・角力(相撲のこと)の
ほか観物興行さらには花火やかがり火も行われ
ていたと書かれています。



新羅神社の「十二支旗」の先端(明治 29 年に元八戸藩
士族等が寄進した旗であることを伝えている)

結びに 明治時代の三社大祭は、町内や商店さ
らには神社関係者などが様々な工夫を凝らし、
風情ある大規模な都市祭礼として既に育って
おり、東北地方屈指の祭りとして広く知られて
いたことわかります。

平成 14 年は東北新幹線八戸駅開業の記念す
べき年ですが、八戸三社大祭を見にきた人たちに
このような祭りの歴史を是非知ってもらいた
いものです。

八戸三社大祭の文化財調査は、祭りの伝
統を探り再認識するための 3 ケ年でもあり
ました。

(* 1) 商宮律は笹の葉踊りとも呼ばれ、士族の子女と商家
の子女が二列に並び唱歌に節を付けて一枚の笹の葉を振
って踊る芸能。現在名川町に伝わるものとは異なるよう
です。

(* 2) 願人踊は伊勢音頭などに合わせ白衣の黒の袷装を
付けて踊る芸能。名川町などに形をかえて現在も伝わ
っています。

(* 3) 軒花は昭和 40 年頃までは八戸三社大祭で飾ら
れていました。

(工藤 竹久)

八戸発展の基礎を築いた2人の銅像が完成

根城を築いた南部師行公

2001年7月31日、南部地方最大の夏祭り「八戸三社大祭」の前夜祭を迎える真夏、八戸発祥の地とも云われます史跡根城跡の一角（市博物館前庭）で厳かな式典が執り行われておりました。それは根城を築いた根城南部氏第4代南部師行公の騎馬像建立除幕式でした。

師行公は、いまからおよそ660年あまり前の南北朝時代、多賀の国府に赴任した陸奥守北畠顕家に従い甲斐国（現山梨県）から奥州にきて北奥羽地方の統治を任され、その拠点として建武元年（1334）に根城を築きました。また、南北朝時代、後醍醐天皇の南朝方に組し、顕家と共に北朝方の足利軍討伐のため上洛の兵を進め、度重なる戦の末、延元3年（1338）5月22日、武運つたなく泉州堺浦（現大阪府堺市）石津川のほとりで壮絶な討ち死にをした悲運の武将です。

さて、史跡の保存・活用等に関わる団体や市民が望んでいた本丸跡への建立は認められなかったものの、条件付きで博物館前庭への建立が認められ、師行公銅像建立がスタートしたわけではありますが、その始まりは、博物館建設時、緑地帯のため調査から除外されていた建立場所の発掘調査でした。

調査が終了し、台座設置工事、騎馬像取り付けと工事も順調に進み、7月31日、根城南部家第37代御当主南部光徹氏をお迎えし、多数の参列者のもと除幕式並びに記念式典が厳粛に執り行われました。式典の最中、時折降り注ぐ雨は、さしずめ『やっと八戸に帰れたという思いの師行公の嬉し涙ではなかるうか』との声も聞かれておりました。（坂川 進）



師行公銅像

初代八戸藩主南部直房公

寛文4年（1664）、盛岡藩主南部重直が後継ぎを決めないまま死去したため、盛岡南部家では跡目相続をめぐる紛糾しました。幕府は、遺領10万石のうち8万石を重直の弟の重信に与え、残りの2万石を次の弟の直房に与える裁定を下し、ここに八戸藩が誕生することになりました。八戸藩の領土は三戸郡の一部や岩手県北にまで広がっており、以降明治時代になるまで直房の子孫が治め、発展してきました。

市では、21世紀最初の記念すべきこの年に、八戸市の歴史を後世に伝え、この町がさらに発展することを願い、八戸藩発展の基礎を築いた初代藩主南部直房公の銅像を、当時の拠点であった八戸城が構えられていたとされる三八城公園内に建立しました。

銅像の建立に対しては多数の方々から賛同をいただき、八戸南部家の菩提寺でもある南宗寺住職田口豊實氏を会長として南部直房公銅像建立協賛会が発足し、特段のご協力を賜りました。

銅像の完成に際し、10月2日には第14代当主南部直敬様（現在東京都世田谷区在住）をお招きして除幕式が行われました。当日は、あいにくの雨天にもかかわらず、200名を超える関係者の見守る中、直房公が姿を現しましたが、その姿は当時と変わることなく城下を見守っている様子です。

皆様におかれましても、三八城公園に足を運んで直房公の姿をご覧ください、八戸の歴史を学ぶきっかけとしていただければ幸いです。お待ちしております。

（小田弘行）



直房公銅像



遺跡配置図